

# 生成AI時代の知財実務：人間とAIの最適な協働ガバナンス（HITL・HOTL・HOOTLの活用）

知財実務における生成AI活用のパラダイムシフト：法的リスクを回避し、効率を最大化するための運用モデル。

## 知財実務におけるフェーズ別の法的リスクと防御



### 【入力段階】

#### 機密漏洩と新規性喪失の回避

未公開の発明をパブリックAIに入力すると、学習データに取り込まれて公知となり、特許取得に必要な「新規性」を世界中で失うリスクがあります。



### 【AI処理・出力確認段階】

#### ハルシネーションとOSS汚染の監視

AIが捏造した判例や科学的に矛盾した実施例、あるいはOSSライセンスに抵触するコードを生成する可能性があります。厳格なファクトチェックが不可欠です。

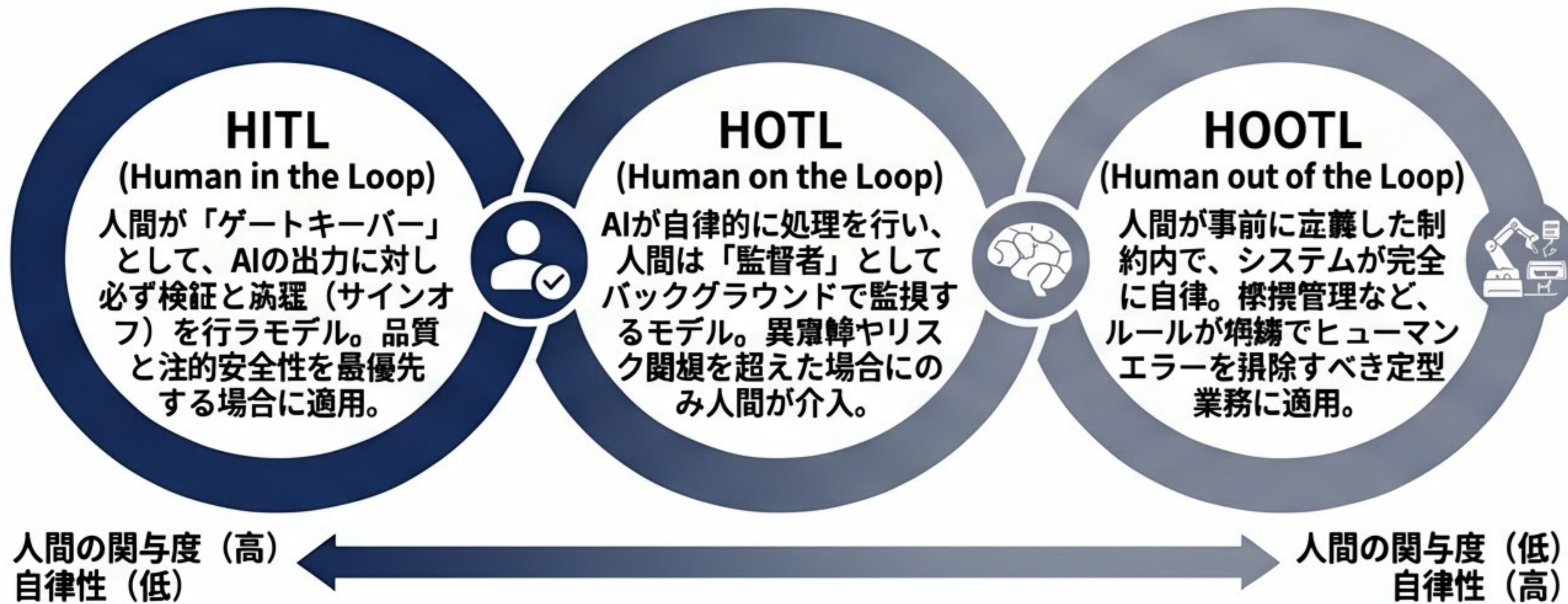


### 【提出・利用段階】

#### 著作権侵害と専門家の誠実義務

AI生成物が他者の権利を侵害していないか確認する責任があり、検証なしにAIの回答を提出することは弁理士の「善管注意義務」違反に関われる恐れがあります。

## 3つの「人間参加型」運用モデル



## 知財業務へのマッピング（適用例）

運用モデル	知財業務の適用例	人間の主な役割
HITL (高リスク)	特許明細書の作成、拒絶理由通知への反論構築、法的見解書	最終承認者、修正者、法的責任の保持者
HOTL (中リスク)	先行技術調査、侵害モニタリング、商標の類似検索	リスクトリガーの監視、サンプリング監査
HOOTL (低リスク)	期限管理（ドケッティング）、年金納付、データ収集	目標設定者、アーキテクチャ設計者

## 2025年以降の展望：エージェンティックAIと移行戦略



### Agentic AIによるHOOTLの拡大

競合他社の監視から脅威判定、レポート作成までを無人で完結させる高度な自律型AIが登場し、人間の役割は「制御塔 (Control Tower)」へとシフトします。

### 組織ガバナンスの3段階移行

短期: 「閉域網AI」による厳格なHITLを構築

中期: 「AIトリアージ」によるHOTLへ移行

長期: AIを統御する「Human in Command」を目指す